

ホメロスにおける *xeinos* について----その2

根本英世

はじめに

Od. における *xeinos* なる語の用例点検に入る前に、この語の語源についていかなる解釈がなされているか、ひとまず概観しておこう：まず結論から述べれば、その語源は明確にされていない。他の印欧諸語との比較研究によりこのギリシア語が、ラテン語 “*hostis*” (見知らぬ人, 敵), 或はゴート語 “*gasts*” (客), さらに古代教会スラヴ語 “*gostb*” (客) などと、音韻の相似性或は語義の共通性を有することは夙に注目される場所である。例えばラテン語 “*hostis*” (<**ghosti-*), “*hospes*” (<**hosti-pet-*, *pet-* は *pot-* に置換可能, cf. Gk. *posis*) は元来 “客” を表すと考え、後者の “客をもてなす人” → “主人(役)” を説明すれば⁽¹⁾, ホメロスにおける *xeinos* の語義解釈, たとえば Il. 6. 224, 15. 532 の用例には一見都合よく思われよう。だが *xeinos* <**ghosti-* が証明されたことにはならないし, また実際のところ *xe(i)nos* の音価 [k*se(i)nos*] の厳密な説明は絶望的なほどに困難で, 現在の段階ではこれらの語との親縁関係は証明不能, とせざるをえない; 仮に分解した音素単位の親近性をそこに見出だしたところで, それは恣意的, 機械的な方法によるものにすぎないと見做されるであろう⁽²⁾, またそのことによつて各語相互間の派生・影響関係, 発展段階が明らかにされるわけでもない。したがつてこの語の語義を分析・確定するには, いわゆる語源学の資するところは期待できず, 当面は文脈から判断するほかない。

別稿の考察⁽³⁾から Il. における *xeinos* が, A) “外国人”, B) “客”, C) “(父祖の代からの) 客人関係にあるもの”, D) “主人役”, を意味する

ことが明らかになった。この分類は概ね Od. の場合にも当てはまる。A)～D) は、各々、A)が136回、B)は50回、C)が13回、D)は2回、すなわち Od. 全編で *xeinos* は都合 201箇所用いられていることになる⁽⁴⁾。しかしながら、A)～D)のグループ間の語義が多様であるように、各々のグループ内でもさまざまなレベル差が予想される。以下に実例を検討することにより、その語義及び使用される状況によるレベル差を確認し、その物語展開との関係を考察したい。

I

A) “外国人”： *xeinos* という語はこの意味で用いられることが最も多く、全使用例の67%に達する。またホメロスには“外国人(の)”を意味する語はほかにも *allognotos*, *allodapos*, *allothroos*, *allotrios* などがあるが、使用頻度において *xeinos* を凌ぐものはない⁽⁵⁾。では何故“外国人”を表すのにこの語が好まれて用いられているのだろうか。それはホメロス及び彼の聴衆にとって、この語の概念的意味 *conceptual meaning* が“自分たちの共同体に属さぬ人”という明確なものを有していたからに他ならないゆえ、と考えられる。例えば上に挙げた他の語は全て *allos* からの派生語であるが、*allo-* は“外国人”を規定するためには必ずしも十分ではない、すなわち“他(人)の”“自己には帰属しない”という否定的側面を表すにすぎないのである。したがってそこには当然“曖昧さ”が残される； *allognotos* <*allos* + *gnotos* (他人には知られた) にしても、字義からは“自分の知らぬ”の謂いとも解せるのだから、必ずしも“外国の”とはなるまい。これに対し *xeinos* の核には“自分のポリスに属さない人”という意味が存在する；これはB)～D)の用例でも、“同国人”が含意されることは決してなく、常に“外国人”であることが前提となっていることから確認されよう。

“異邦人”“よその土地の人”はポリス相互間の交流が稀であった古代社会では、“見知らぬ人”であり“珍しい人”であった。彼らが、現在同様、

ときには警戒の或は軽蔑の対象となり、ときには厚く迎えられたであろうことは想像に難くない。そのような意識はその語が用いられる際にならざるを得たはずである。以下にその実例を検討してみたい。“異邦人”“よその土地の人”はその人が“自分のポリスに属さない人”という単なる客観的事実を述べているにすぎず、そこにはネガティブ或はポジティブな特別感情は含まれていない。これは或る社会の人間が外部の者に対してもつごく基本的で当然な意識であり、“中立的”な用法であると云えよう。例えば第1巻でオリュムポスの神々の会議の場を発ち、イタケのオデュッセウスの館の前に現れる女神アテネは、

xeinos の姿、タポス人の長メンテスの似姿をとって 1.105

と描写されている。当時タポス人は海賊として知られていたようだが⁽⁶⁾、そのことはここでのアテネの役割と関係なく、単に“異邦の人”“外つ国人”の、すなわちイタケという狭いポリスの人々にとっては“未知の人”の姿で現れたことが述べられているにすぎない。

上の例は地の文章からのものだが、この用例は会話文にも多く見られる。第4巻でテレマコスとペイシストラトスがスパルタを訪ねたおり、両人の姿を認めたメネラオスの従者が、王に、

「ゼウスの育み給うメネラオスさま、どなたか二人の xeinos がおいで
です」 4.26

と告げる。ここでも二人の貴公子に対する好意もしくは敵意は表されておらず、彼らをどのように扱うべきかを尋ねるべく⁽⁷⁾、単に“(自分の)存じ上げぬおふた方がいらっしゃっている”という事実が報告されているだけである。これらの用例は、互いの家系まで熟知し合うほどに緊密な人間関係をもっていた当時の小さな共同体の構成員が、“異邦人”を“未知の人”と認識していることを示すにすぎず、いわば“無色”なものと云えよう。

II

しかし同じく初対面の“異邦人”に対するものではあるが、次の例はどうであろうか。上に述べた第1巻の館の前に立つアテネに、テレマコス、

真っすぐに玄関口へ行った、心に疚しく感じたからである、

xeinos を長い間戸口のところに立たせたまましておくことを。 1. 119f.

語義としては“異邦人”“未知の人”でよいが、それに対する心的態度には上の例とは異なったものが見られる。テレマコスの倫理規範では、自分の館の前に居る“見知らぬ人”に声をかけぬまま放っておくのは、恥ずべきこととされているのである。したがって彼はさっそく、

「ようこそ、よそのお方、私どもで歓迎いたしましょう。

食事を済ませて、御用件の向きをおっしゃってくださいませよう。」

1. 123f.

と語りかける。さらに彼が、求婚者たちから遠く離れた場に、この異邦人のための座をしつらえたのは、

異邦の人が、傲慢な輩と同座して、その物騒ぎに気をそこね、

食事をする気も失せてしまわぬように、 1. 133f.

と案じてのことである。

このような配慮が示される背景には、“故国を離れ他郷にある異邦人・旅人に対しては親切でなければならぬ”という当時既に確立していたと思われる社会規範、Zeus xeinios “異邦の人を守る神ゼウス”への信仰が看取される⁽⁸⁾。すなわちこのような心配りは、社会のまっとうな一員であれば異邦人に対して守るべき“ガイドライン”として感じられていたのであろう。したがってテレマコスのみが異邦人を最初からこのように扱っているわけではなく、他にもネストルの息子ペイストラトス、豚飼いのエウマイオスがいるし、さらにオデュッセウスを“客”として受け入れる以前から、彼の帰国に対して好意的なアルキノオスを始めとするパイエケスの宮廷なども挙げられよう⁽⁹⁾。そしてペイストラトスは テレマコスが父の消息を求める旅の

好伴侶となり、エウマイオスは主人公帰国後の忠実な部下となり、パイエケスの宮廷は彼の帰国成就に大きな影響を与えることを想起すれば、異邦人に対して積極的に親切を施す登場人物は、物語展開の上で重要な役割を演じていることが首肯できよう。このような対異邦人意識を、上述の“無色”“中立”な心の在り方に比して、いま“ポジティブ”なものと呼んでおく。

だが一般的には異邦人に対する意識は、第6巻のナウシカア、第7巻のアテネ扮するスケリエの少女などの例に見られるように、当該の異邦人が自分に対して少なくとも敵意を持っていないことを確認してから、親切を示す、という変化のパターンをとる。例えば、当初は腰元たちも驚き逃げるほどの姿のオデュッセウスを目にして、膝も震えていたナウシカアは、彼の分別ある嘆願の言葉を聞いて、彼に好意を示すにいたる。彼女は決して最初から彼に協力的であったわけではなく、アテネの助力によって彼の言葉を最後まで聞くことができたのである⁽¹⁰⁾。

前述のようにパイエケス人貴族は、当初からオデュッセウスに対して好意的であったが、島民は一般に異邦人を好まぬとされており、彼の場合には特別であったと云えよう⁽¹¹⁾。しかしながら王妃アレテは宮廷の貴族たちとは異なる。彼女はオデュッセウスの帰国嘆願を名指しで受けながら、当面は彼と宮廷の人々との言葉のやりとりに耳を傾けるのみであった。何故彼女は沈黙を押し通したままなのであろうか。その理由はテキストに求められる。

かれらの間でただむき白きアレテが語り始めた、

というのも見事な着衣、上着や下着を見て取っていたから。 7. 234f.

下線部の表現⁽¹²⁾は彼女が、口を開く以前から既に、オデュッセウスが纏っている衣服について疑念を持っていたことを示しており、それについて問い詰めるつもりならいつでも可能だったことになる。にも拘らずそのような行為をとらず、並居る人々の間で黙っていたのは、眼前の異邦人の人柄を細やかに観察していたものと考えらるべきではなかろうか⁽¹³⁾。

さらにこの典型と見られるのが、ペネロペイアである。彼女は、愛する息子テレマコスがメネラオスの言葉として、夫による求婚者たちへの復讐があ

るだろうと、伝えたのち、さらに自身が直接聞いた異邦人テオクリュメノスの言葉に対して、積極的な反応を示さない。彼女はこれまで幾多の同様な話を聞いて懐疑的になっているのである⁽¹⁴⁾。また館の中で求婚者たちに撃たれた異邦の乞食から何らかの情報を得ることができるのではないかと、エウマイオスに彼を連れてくるよう命じるが、未だオデュッセウスの変装に気づかぬ豚飼いが、乞食の話は彼女をとろかせるだろう⁽¹⁵⁾、と言っても、自分自身でその人物を確かめなければ承知しようとしなない。この人物を或は“異邦のお方”或は“流浪のお方”と呼び、彼に対する彼女の評価は未だ定まっていないのである⁽¹⁶⁾。しかしその彼女も彼の話の聴いた後では、好意を示すことになる⁽¹⁷⁾。ペネロペイアの此処の態度は彼女のエピテトン“心聡き”にふさわしいものと云えよう。

すなわち異邦人・未知の人の言葉遣い、立ち振舞いが、彼に接する人々の意識を決定するのである。異邦人に対する態度がこのように“無色”なものから“ポジティブ”なものへと推移していくのは、現在同様、ごく自然であろう。

III

しかしながら全篇の数多い登場人物には、逆に、異邦人に対して始めから敵意・悪意をもち、ときには害意を示す者さえいる。その代表が単眼の巨人ポリュペモスである。洞窟に戻って来た彼に、オデュッセウスが、自分たちは嘆願者であると名乗り、異邦の旅人が当然受けるべき贈り物を願っても、或は神々と Zeus xeinios とを畏れ敬うよう忠告しても、この傲岸な怪物は、

「お前はうつけだな、よそ者よ、それともはるか彼方からやって来たというわけか、

俺さまに神々を憚れ、だの、神々の嗔恚を避けよ、だの、のたまうとは。キュクロプスたちはアイギスを持つゼウスでも、至福の神々でも、屁とも思っていないのだ、なにしろ俺たちのほうがずっと強いのだか

と答えるのみである。さらに、こともあろうに、二度にわたってオデュッセウス一行から二人の部下を擱み出し、食べてしまう。ポリュペモスの非道ぶりが窺われよう。しかし彼はその暴虐の代償として、一つしかない目をオデュッセウスの知略によって、焼き潰されることになる。苦況にある異邦人を助けぬばかりか、彼らの命を奪うことにより、神々殊に Zeus xeinios を蔑ろにした彼は、かけがいのないものを失ってしまう。

10巻に登場するライストゥリュゴン人との遭遇もオデュッセウスたちには大きな災厄となった。彼らの島に船を着けた一行から三人が偵察に選ばれ、途中出会った王女の教えた王宮に入っていったが、うち一人は突然王に食べられてしまう。他の二人は急遽船に還り着くが、呼び集められた巨人のような島民は一行の船をめぐらして岩を投げつける。その結果残った船は僅か一隻、多くの仲間が彼らの餌食となってしまう、有様である⁽¹⁸⁾。このエピソードでは xeinios という語は用いられていないが、彼らの異邦人に対する害意は十分に伝わってくる。異邦人が館に入るやいなや、妃は王を呼び、王が彼らに襲いかかる、とは、獣と変わりないではないか。

自分の土地を訪れた異邦人に対してこのような振る舞いに出る彼らを、ホメロスはどのように描いているのだろうか。まずポリュペモスの属するキュクロプスの一族は、農耕も弁えず自然の恵みに頼り、集会も掟も持たず、互いのことは全く構わずに家族単位の生活をしており、外の世界との交流の手段となるべき船を作る術を心得ぬ、と描写されている⁽¹⁹⁾。これは、農事を生活の基本として⁽²⁰⁾、集会での討論・決定を重んじ⁽²¹⁾、必要とあればトロイアまでも大軍勢を送り出すことができ、“山々は隔てるが、海は結ぶ”と考えていた人々から見れば、“社会”と呼べるものではない；少なくとも“文明世界”とは云えないであろう。彼らの目にはこのような生活を営むキュクロプスたちが“野蛮人”そのものと映じたに違いない。彼らを“無軌道で無法な”⁽²²⁾と呼ぶのは、決して誇張でもなければ悪意でもない。ギリシア人には現実としては想像不可能な、まさに神話的な世界である。

ライストゥリュゴン人については神話学的にも確かなことは知られていないが、彼らの土地では夜と昼の径が互いにすぐ近くにある⁽²³⁾、との記述から、“白夜”に近いものを想定し、かなり高緯度の地域の住人、もしくはその近接民族であろうとの推測がなされることがある⁽²⁴⁾。だがその国の地理的位置が不明瞭であつても、彼らが、ギリシア人の知っている世界からとてつもなく離れた地域の住人として描かれていることは間違いなからう。ポリュペモスの場合と異なり彼らの行為は応報を受けないが、外来者に対するその非道且つ非人間的な敵対行為は、以後物語の中でキュクロプスのエピソードと相並んで、想起され、語られている⁽²⁵⁾。これは、ポリュペモスもライストゥリュゴン人も共に、当時のギリシア世界から遠く離れたところに棲む、“文明”の恩恵に浴さない“野蛮人”と見做されていることを示すと考えられよう。すなわちギリシア人にとっては、人間とも思えない----事実ポリュペモスは単眼の巨人、ライストゥリュゴン人は大力の巨人と語られている⁽²⁶⁾----輩だからこそ、異邦からの外来者をこのように扱うのだと、納得されるのである。これは、それなりの根拠がある“文学的真實性 dramatic reality”を感じさせたのではないだろうか。

しかし他方には、文明社会に住んでいながら、異邦人に敵意を示す者たちも居る。ペネロペイアの求婚者たち及びその取り巻き連である。彼らは、最初から、乞食姿のオデュッセウスに対し無礼な言動に出る。例えば求婚者たちの腰巾着となっている山羊飼いのメランティオスは、宴の席で物乞いする乞食について求婚者たちに、

「ここに案内してきたのは、確かに豚飼いですが、

どこの生まれと称しているのかは、しかとは存じません」 17. 372f.

と語る。まるで厄介者を嫌々ながら紹介しているようである。この言葉を受けて、求婚者の一人アンティノオスがエウマイオスに、

「くだんの豚飼いよ、なぜおまえはこいつを町へ

連れてきたのだ...」 17. 375f.

と尋ね、不快感を露にする。彼はさらに、物乞いしつつエジプトやキュプロ

スでの身の上話を語る主人公に、

「一体どんな神が、こんな厄介の種を寄越したのだ、宴の災いを。
そうれ、真ん中に去け、俺の食卓から離れているのだ、
じきにエジプトやキュプロスの酷い目に遭わないように、な。
何と厚かましく、恥知らずな乞食なんだ。」 17. 446ff.

と悪態をつく。

オデュッセウスの留守中にイタケでの力関係は大きく変化しており、館の使用人の中にも求婚者たちの歓心を買おうとする者たちが生じている。例えば、メランティオスの妹であり、幼いときにはペネロペイアに慈しみ育まれた召使メラントも、求婚者の一人エウリュマコスと通じて、いまは女主人のために悲しむこともない⁽²⁷⁾。この恩知らずも、乞食姿のオデュッセウスが目障りだとして、

「惨めなよそのさん、あんたは正気をなくしてしまったのね」 18. 327
と罵る。

異邦の乞食に対する彼らのこのような仕打ちはさらに続くが、それは全ての求婚者や召使が行うわけではなく、幾人かが繰り返し、その都度無礼の度合は高まる、というパターンをとる。アンティノオスは上に見たように既に二度の非礼をはたらしているが、最後には乞食に足台を投げつける⁽²⁸⁾。またエウリュマコスは、まず乞食の頭髪が無いことを罵り、次に乞食生活で勤労意欲がなくなってしまったのだらうと軽蔑し、最後に彼も足台を投げつける⁽²⁹⁾。メランティオスの場合は上の17巻に続いて、第20巻で、

「よそ者め、まだここの館の中で迷惑をかけているのか

皆様方に物乞いしながら、出て行く気はないのか」 20. 178f.

と馬鹿にする。メラントも上の侮辱に加えて第19巻で、

「よそのさん、まだここで夜どおし迷惑かけてるの

家じゅうほつつき歩いて、女の人たちに色目をつかう気かしら」

19. 65f.

と彼を嘲る⁽³⁰⁾。

以上異邦からの外来者に対する残虐な、或は無礼な対応を見てきたが、そこに表れた対外国人意識を“ネガティブ”なものと呼んでおこう。だが既に明らかになったようにこの“ネガティブ”なものは二つに分類できる；一つは、ポリュペモスやライストゥリュゴン人における“無知”もしくは“未開”に基づくものである。他方は文明社会におけるもので、これは前者とは本質的に異なる。外来者への“礼讓”は既に見たようにホメロス社会の規範となっているのだから、これを犯す者に対しては、叙事詩の聴衆の怒りが向けられよう。そしてその怒りは主人公オデュッセウスの怒りとも一致する。すなわち詩人は、物語の中では英雄の胸中に求婚者及びその一党に対する怒りを駆り立てつつ、同時に、叙事詩吟唱の場においては聴衆の義憤と不満を募らせ、英雄が復讐を遂げる大団円を聴衆のカタルシスに結びつける、という手法を用いているのである。

しかし聴衆の不満は無制限に脹らむわけではない。長時間の吟唱に耳を傾ける聴衆のため物語理解の助けとなるよう時おり全篇の展望・要約が示されるように⁽³¹⁾、この異邦人に対する態度は、登場人物の善悪を識らしめるといふ機能をもつ。それは具体的には、社会規範を守り、異邦人に礼儀ある態度をとるものは善人、当初から露骨な害意を示すものは悪人、という単純なものである。だが文字によって物語の進行を楽しむ現代とは異なり、絶えず消えてゆく音声に頼っていた当時では、この明解さは必須のものであった。

どの社会にもいわゆる“建前”と“本音”があるものだが、ホメロスの社会でも“理念上”は Zeus xeinios に対する信仰が強調されてはいるものの、現実には全ての外国人が無条件で好意を得られたわけではない。異邦人の中にも不埒な輩は当然いるもので、例としてはキコン人のもとにおけるオデュッセウス一行が挙げられよう；彼らは辿り着いたイスマロスで 住民虐殺・婦女拐帯・財産掠奪を欲しいままにおこなっている⁽³²⁾。また神意にそぐわぬ異邦人も拒否される；アイオロスに一度は歓待された英雄一行が、その愚行ゆえに二度目は滞在を拒絶される例が、これにあたる⁽³³⁾。さらに迎える側の都合もあろう；現実には異邦の乞食に対して好意を示しているエウマイ

オスでさえも、

「一体誰が自から出向いて余所から異邦人を呼んで来るでしょうか、
その人がデミウルゴス以外の人だったら…」 17. 382f.

と言っている。これは意外と、異邦人でも特殊な技術を身につけた人間以外には、あまり来訪してもらいたくない、という風潮が当時存在していたことを示すものかもしれない。にも拘らず、“理念”的要素も感じられる Zeus xeinios への信仰に基づいた人間関係を一つの軸として、ホメロスは作品を展開させている。人々がホメロスを“ギリシアの教育者”⁽³⁴⁾と賛美した理由の一つはこの辺にも求められよう。教育とは理念の実現の謂いにほかならないから。

xeinos が受け入れられると B) “客”になり、また C) “客人関係をもつ人”となる。そしてこの語は D) “主人” “もてなし役”の意味ももつ。しかし“客”として受け入れられるためにはホメロスの世界には諸々の条件が存在していた。B)~D)についてはさらに別稿で論じたい。

註

(1) E. Benveniste, Le Vocabulaire des institutions indo-européennes, Paris 1969, t. 1., ch. 7.

(2) H. Frisk, Griechisches etymologisches Wörterbuch, Bd. 2, Heidelberg, 1973, 333f.

(3) 拙稿「ホメロスにおける xeinos について----その1」, 『西洋古典論集』IV(1988).

(4) Th. Allen (Homeri Opera, tom. III, Oxford Classical Texts) は4. 399 については“xeine”でなく“tauta”の読みを採る。

(5) “外国人(の)”と形容詞も含めたのは、ギリシア語の性質上形容

詞が実体詞として用いられる可能性を考慮してのことである。例えば Od. 14. 102 に見られる *xeinos* は後続の名詞 *botores* (牛飼いたち) に懸ければ形容詞と解しうる。cf. 19. 371 また *allodapos* も形容詞としても実体詞としても用いられている。なお以下本稿では『オデュッセイア』からの引用は前後関係から明かな場合は作品名 Od. を省略する。

(6) 15. 427, 16. 426 なおタポス人には *phileretmos* (權を好める) というエピテトンが添えられることがある。1. 181, 419.

(7) cf. 4. 28f. なお 以下本稿では会話からの引用もしくはその要約は「 」で示す。

(8) 古典期の文献には頻出するこの *Zeus xeiniος* なる表現はホメロスでは 11. 13. 624-5, Od. 9. 270-1, 14. 283-4 のみに見られる。だが Od. の以下の箇所では *Zeus* が *xeinos* の保護者として言及されている: 6. 207f., 7. 165, 9. 478f., 14. 57f. (=6. 207f.), 402ff. cf. 7. 331, 13. 51f.: 14. 402ff. では豚飼いエウマイオスが「*xeinos* を歓待しておいたのち殺しでもしたら、誉れを得ることになろうし、ゼウスに心から *prophron* 祈ることもできよう」と“逆説的”な表現をしているが、これは社会的にも *Zeus xeiniος* が認められていた一つの証左となろう。cf. Stanford, The Odyssey of Homer, vol. 2, London ²1965, 231f.

(9) 3. 34ff. (殊に35の *protos* に注目したい), 14. 37ff., 7. 159ff.

(10) 6. 139ff. アテネが彼女に勇気を吹き込み、膝から恐怖を取りのぞいた。

(11) 7. 32f. でアテネ扮する少女からパイエケスが外国人を好まぬことが報らされており、ナウシカアの話にもその類の人物が語られる, 6. 274ff. 殊に 282f.

(12) 下線部の原語は *egno*, aor. 2 < *gignosko*. ホメロスにおけるアオリストは屢々問題となるが、ここは plpf. として用いられているものと考えられる。cf. Ameis-Hentze: Homers Odyssee 12, Leipzig-Berlin 1908 (Amsterdam 1964), ad loc., Monro: A Grammar of the Homeric Dialect,

Oxford, 21891(Hildesheim 1974).

(13) オデュッセウスの嘆願は 7.146-152 だが、王妃が初めて口を開くのは 237 である。しかし本論のように考えれば、彼女のこの沈黙を例えば“本来は 237 は 152 に続くべき” (e.g. Schadewaldt: Kleiderdinge, Hermes 87, 1959, 13-26) と考える必要はなくなる。

(14) cf. 17.152ff., 19.309ff., 350ff.

(15) 17.513ff. “とろかせる”の原語は“thelgoito”で、この語はカリュプソがオデュッセウスをオギュギエに引き留めるとき、セイレネスがその歌声で船人を魅する場合など、決してよい意味では用いられない。ここのエウマイオスの言葉は直接には、以前彼自身が乞食姿のオデュッセウスに忠告した言葉「決して偽りごとで儂を喜ばせたり、うまいことを言ったりしなさるな」(14.387)を受けているので、豚飼いは異邦の乞食を信用していないことになる。

(16) ペネロペイアは乞食を連れてくるよう豚飼いに二度命じる、17.508f., 529f. また 17.576 では *xeinós* ではなく *aletes* が使用されている。

(17) 19.317ff.

(18) 10.88ff.

(19) 9.106ff.

(20) e.g. 1.407 et passim.

(21) e.g. 1.272f. et passim.

(22) 9.106.

(23) 10.86.

(24) 例えば当時既に交流があった北海沿岸地方の描写ではないかとする説もあるが、単に神話の世界と見る学者も居る。cf. RE II 425ff., Page: Folktales in the Homer's Odyssey, 1973, Massachusetts, 25ff.

(25) 10.198ff., 23.312ff.

(26) “人間離れした巨人たち”(10.120), “人間がやつと持ち挙げら

れる岩を放り投げた” (121f.) , “ (人間たちを) 魚のように銚に突き刺しておぞましき食事とすべくもっていった” (124) . 但しライストゥリユゴン人は, その島には町があり (103f.) , 娘が泉から水汲みをし (105) , “集会” を持つ (cf. 10. 114) など, キュクロプスよりは人間に近い社会を営んでいる.

(27) 18. 321ff.

(28) 17. 462ff.

(29) 18. 351ff. , 357ff. , 389ff.

(30) イタケで“異邦の乞食”に仇をなすものとして他に, 乞食のイロス, 求婚者クテシッポスが挙げられる. 前者はその場でオデュッセウスに痛めつけられるので問題はないが, 後者の侮辱は一度だけである (20. 292ff.) . これは本文で言及したように侮辱の Steigerung との関係から, 登場人物の重要性によるものと解せる.

(31) “展望”は例えば“テイレシアスの予言” (11. 92ff.) , “要約”は例えばオデュッセウスがアレテに語る話 (7. 241ff.) .

(32) 9. 38ff.

(33) 10. 1ff.

(34) e. g. Pl. Rep. 606E プラトンはこの箇所では“ホメロス=ギリシアの教育者”説に反論を試みようとしているとも思えるが, 話題はここで終わってしまっている. cf. Adam: The Republic of Plato, vol. 2, 1929, Cambridge, ad loc.